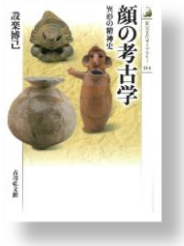
★ 第8回古代歴史文化賞 受賞作品一覧 ★

賞名	書名	著者名 出版社・年月	作品の概要	選定の理由
大賞	顔の考古学 異形の精神史 	設楽 博己 吉川弘文館 R3．1	縄文時代の土偶をはじめ仮面・埴輪・土器など、律令時代までの造形物に見られる「鬼」や「イレズミ」といった特異な顔の表現について、その意味と果たした役割、変遷を論考する。そして、各時代の顔の分析・比較から、著者が専門とする弥生時代社会の特色を論じ、さらには現代社会が抱える課題にも通じることを指摘する。	本書は、考古資料の中でも、その用途が明らかになっていない縄文時代の土偶や仮面、弥生時代の顔のついた土器、古墳時代の人物埴輪など、特異な顔の表現を取り上げ、古代の人々のメッセージを明らかにしようとするものです。 節分でおなじみの「鬼」や、日本社会において負のイメージが強い「イレズミ」、また縄文の美の象徴として広く人気がある「土偶」など、日本人に馴染みのある資料を取り上げて、その意味と果たした役割、変遷が検討されており、一般の読者が興味をもって読み進めることができます。また、これまで断片的に評価されてきた「顔」資料について、考古学の基礎研究を踏まえたうえで、総合的に検討した点が高く評価できます。 こうした「異形の顔」の分析を通して、著者は、日本社会の大きな変化を弥生時代に求め、この時代から戦争や格差社会、グローバリゼーションが始まり、現代社会が抱える課題につながっていると説きます。考古遺物の分析から、広く日本社会の課題までも導き出す本書は、歴史資料が果たす役割や可能性を示したもので、古代歴史文化賞大賞にふさわしい作品です。
優秀作品賞	気候適応の日本史 人新世をのりこえる視点 	中塚 武 吉川弘文館 R4．3	古気候学の研究成果から、気候変動の時間的なスケールを数百年の「長周期」、数十年の「中周期」、一年から数年の「短周期」の3つに分けて歴史事象と気候適応の関係について考察する。特に従来行われていなかった「中周期」による考察を行う。また、今日的課題である地球環境問題への対応にあたっては、気候適応史研究が重要であると説く。	本書は、古気候学という過去の気候を研究する立場から、気候の変動に対して、当時の人々がどのように適応したのか、もしくは適応できなかったのか、という因果関係を追求するものです。 数百年単位の長周期、数十年単位の中周期、数年単位の短周期の3つの時間的周期の中で、とりわけ、近年その実態が解明されつつある数十年単位の中周期が、大きな歴史的な変化と良く対応することを示すことで、古気候学の著しい進展が、従来ともすればその背後に追いやられていた自然環境、とりわけ気候変動が人類の歴史に大きな影響を持つことの意義を正面から示すものです。年単位に迫るほど詳細に復原されたデータを用いて説明される歴史の転換点と気候変動との因果関係は、歴史学、考古学、年輪年代学など多分野との学際的共同研究の成果であることも重要な意味を持ちます。 今日我々が直面している地球温暖化や、人類環境への関与などにも言及することで、今後の考古学・歴史学研究の方向に新しい息吹を吹き込む意欲的な作品となっており、優秀作品賞にふさわしいものです。
	戸籍が語る古代の家族 	今津 勝紀 吉川弘文館 R1．10	現代の戸籍制度から出発し、古代の戸籍の作成目的と性格、記載される人の範囲や身分などの内容を解説する。そして、記載内容の分析や周辺資料から、古代の人口数や平均余命、出生率、婚姻の実態と夫婦関係、飢饉や疫病などの状況を提示し、古代社会の厳しい環境の中で、人々がどのように生きてきたのかを明らかにする。	本書は、残された古代の戸籍と周辺資料の詳細な分析を通じて、古代日本の人口動態や平均寿命などを推計し、その基盤となった生活の根幹である婚姻、夫婦関係などの家族構成とその在り方や動態を掘り下げることで、古代社会の全体像を呈示しています。とりわけ繰り返される、飢饉、疫病などによる人口減少が戸籍上にも反映されている例が多数みられるなど、厳しい社会環境の中で古代の人々がどのように生き延びる努力をしていたか、などを戸籍に表された家族の有り様を軸に読み取る新たな視点を示した作品です。 本書は、今日の高齢化・人口減少などが問題とされるなかで、個人を超えた社会の継続という視点から古代の家族の在り方、人々のライフスタイルや生存、人口の問題に目を向け描き出しているもので、今後の歴史学が、何を明らかにしていくべきか、目指すべき一つの方向性を示すものとして高く評価でき、優秀作品賞にふさわしいものです。
	人事の古代史 律令官人制からみた古代日本 	十川 陽一 筑摩書房 R2．6	古代日本において、国家運営のために取り入れた律令官人制について、奈良時代を中心とした官人統制の仕組みと歴史を概観する。その上で、官職につけない多くの官人「散位」の存在を紹介し、古代国家にとって官人がどのような存在であったのかを論じる。平安時代に至るまでの律令官人制の定着と展開を通観した書。	本書は、位階にもとづく官位制・官人制が天皇を中心とした古代中央集権国家の骨格をなすことと、これが定着していく過程を主に奈良時代から平安時代まで通観したものです。 ともすれば煩雑な支配体制や人事制度を丁寧に整理し、これに関わる人事の具体的な有り様、高位高官の人事、あるいは位階があっても官職につけない散位などの具体例を取り上げ、官職登用の仕組みや生活手段、古代官人制の実態と展開、ひいては古代国家権力の地方への浸透とその変容や、さらに中央の都城の変遷・変貌にまでも視野に入れたものとなっています。 古代日本における国家支配を人事制度から見ていこうとする本書は、従来にはない新しい試みで、生き残りをかけた官人の姿を具体的に描くことで律令制度をより身近に感じさせる作品ともなっています。こうした視点での官人制を取り上げたものはこれまでになく、大変意義深い作品として、優秀作品賞にふさわしいものです。
	万葉集に出会う 	大谷 雅夫 岩波書店 R3．8	現在も広く親しまれる『万葉集』の従来の読みと解釈について、近世期国学の注釈史研究や中国文学との比較研究を踏まえて検証・訂正し、歌を詠んだ作者の思いに迫る。また、万葉集の特色となっている「擬人表現」「相聞歌」などの紹介や、これまであまり注目を浴びなかった作品にも触れて、万葉集の多彩な魅力を伝える。	本書は、現在も広く知られている『万葉集』について、日本語が漢字で表現されているため後世に様々に解釈され、その時代の思想で読まれてきた『万葉集』の子細な再検証をとおして、新たな出会いをもとめようとするものです。 特に、小中学校の教科書にも取り上げられる有名な「さわらび」の歌や、柿本人麻呂の狩猟の歌については、江戸時代の著名な国学者である賀茂真淵の解釈と読みが今日まで定着してきたことを明らかにし、その子細な再検証からそれを訂正するくだりは新鮮な驚きを与えるものです。 加えて万葉集の特色である擬人表現や多数の相聞歌に込められた意味、そして従来あまり注目されて来なかった歌にも触れて万葉集の新しい魅力を引き出そうとしています。 著者とともに万葉集の謎解きをしているような感覚で万葉集の魅力に導かれる本書は、これまでにない新しいスタイルの作品となっており、優秀作品賞にふさわしいものです。